

岡山城跡本丸 次発掘調査現地説明会資料

1995.2.25

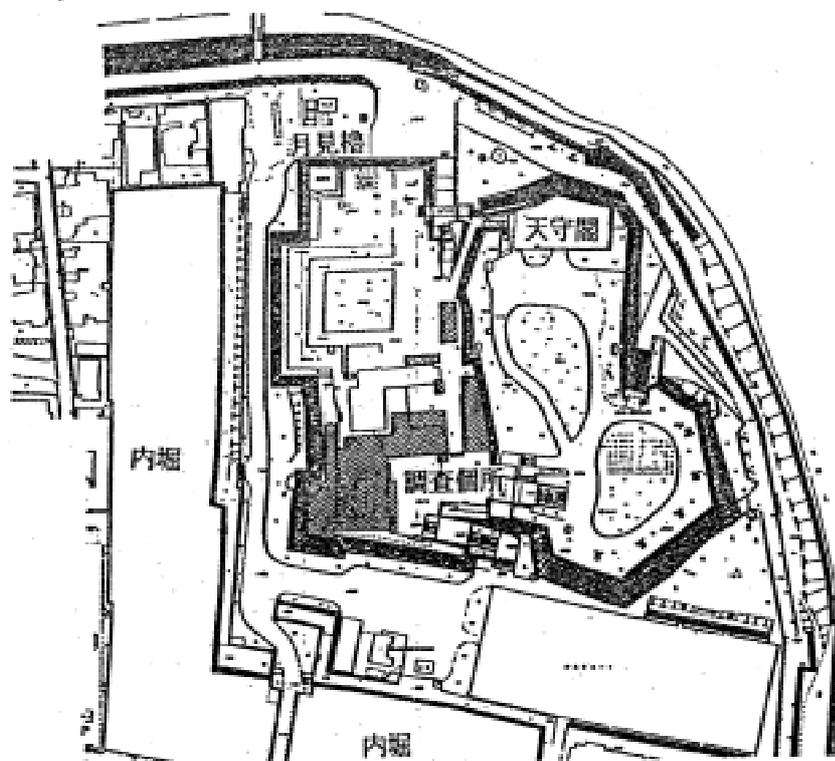
岡山市教育委員会

1.はじめに

岡山城跡の本丸一帯は、烏城公園として復元天守閣と共に、広く市民に親しまれていますが、1987年に国の「史跡」に指定されたのをうけて、遺跡としての観点からの整備・公開をめざす事になりました。その第一歩として、まず地下の遺構の有無や内容を握する必要があります。このため、1992年から順次、発掘調査を行なっています。今年度分は昨年10月に開始し、目下進行中で、日々新しい発見が相次ぎ、従って今なお不確定な事柄も多いのですが、これまでの成果をお知らせしましょう。

発掘を行っている場所は、天守閣のある本段から西に一段下がった中段で、本丸で唯一の現存建物である月見櫓の周辺です。大名池田家の私御殿が天守閣前にあったのに対し、ここは、表書院と呼ばれた岡山藩の政治や儀式を行うための公の御殿が、ほぼ江戸時代を通じて建っていた場所で、内でも今年度の発掘地は、その南半分が主体です。

確認された遺構は、表書院の時代(月見櫓やその一帯の石垣が出来上がり、中段が明治維新まであらた姿に完成した江戸前期よりも後)の地盤面で見つかったもの、それらより深い層で見つかった江戸時代前期を遡る石垣や建物跡など、に大別されます。



2.表書院の時代の遺構(江戸前期から幕末)

表書院や月見櫓を除く櫓・門は、明治維新の時に取り壊され、その後、岡山第一中学の校舎などが建ち、また戦災の瓦礫を埋めるため大穴があげられたりして、遺構の一部は既に損われています。しかし、明治維新以後、そのつど地上げをしてこの地を利用した事から、当時の地盤や遺構がそのまま埋め込まれて残っている部分も各所で確認できます。

江戸時代中期初めの元禄年間以降の様子は、岡山大学池田家文庫などにある絵図から窺い知ることができます。これらによると、表書院は数棟からなる主要建物が一体化したもので、延数にして850畳敷きのもの大御殿です。昨年度発掘した、北半部は、奥むきで上の広間、池・能舞台・茶室を備えた中庭、台所などがあります。一方、今年度の南半部は、表向きに当たります。正規の登城ルートにしたがって、階段(鉄門)を上り切ったところに広場=枳形があり、その北東部には番所を備えた玄関が口を開けています。枳形の北には、上部に塀を伴った石垣があり、身分の高い人や客入だけが通り普段は閉ざされていたとみられる平重(塀中)門に階段が取り付けられています。その北側に、少し建物のない空間があって、表書院の建物群が展開します。ここには、表書院で最も南の大広間である梅の闇(36畳)などがあります。枳形の西にはやはり塀を伴った石垣があり、その奥は建物がなく庭になっていますが、南側に石垣・塀に張り付く格好で、表書院からの離れとして「御年寄中休所」や付属する雪隠(トイレ)があります。さらに、南西の奥は、高石垣が張り出し、三階建てで天守閣に次ぐ規模を誇った大納戸櫓があります。この櫓は、関ヶ原合戦の後に入封した小早川秀秋が、岡山市沼にある亀山城(沼城)から移したものと伝えられるものです。

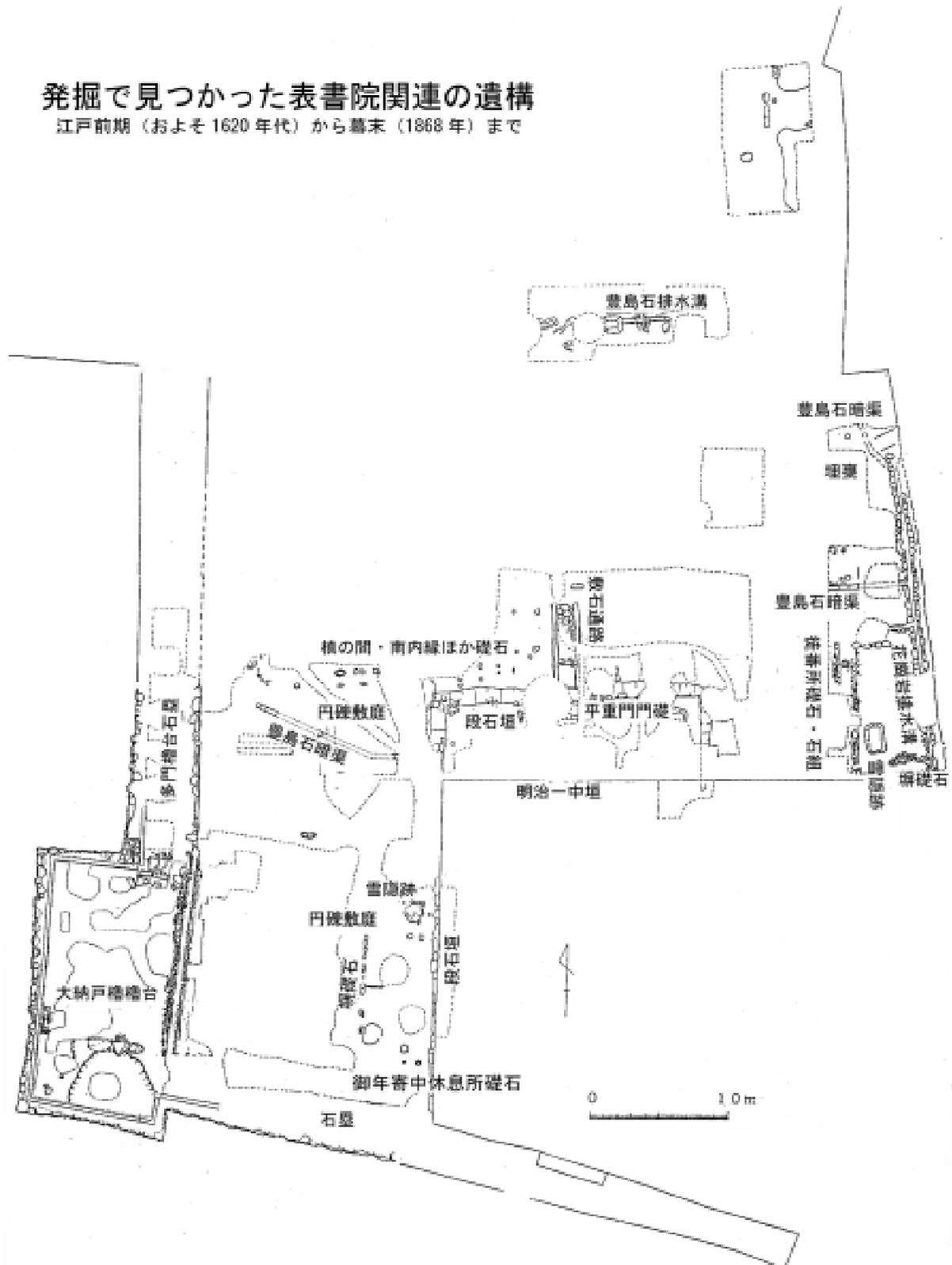
実際に発掘をしたところ、様々な遺構がみつかりましたが、それらの配置や内容は良く絵図と一致しています。また、排水溝や庭の様子など絵図からは窺えない事柄の発見もあります。絵図があるとはいえ、実際の「もの」として遺構が確認できることは、意義深いことですし、逆に絵図を補足し、その信ぴょう性を確認できたことも大きな成果です。

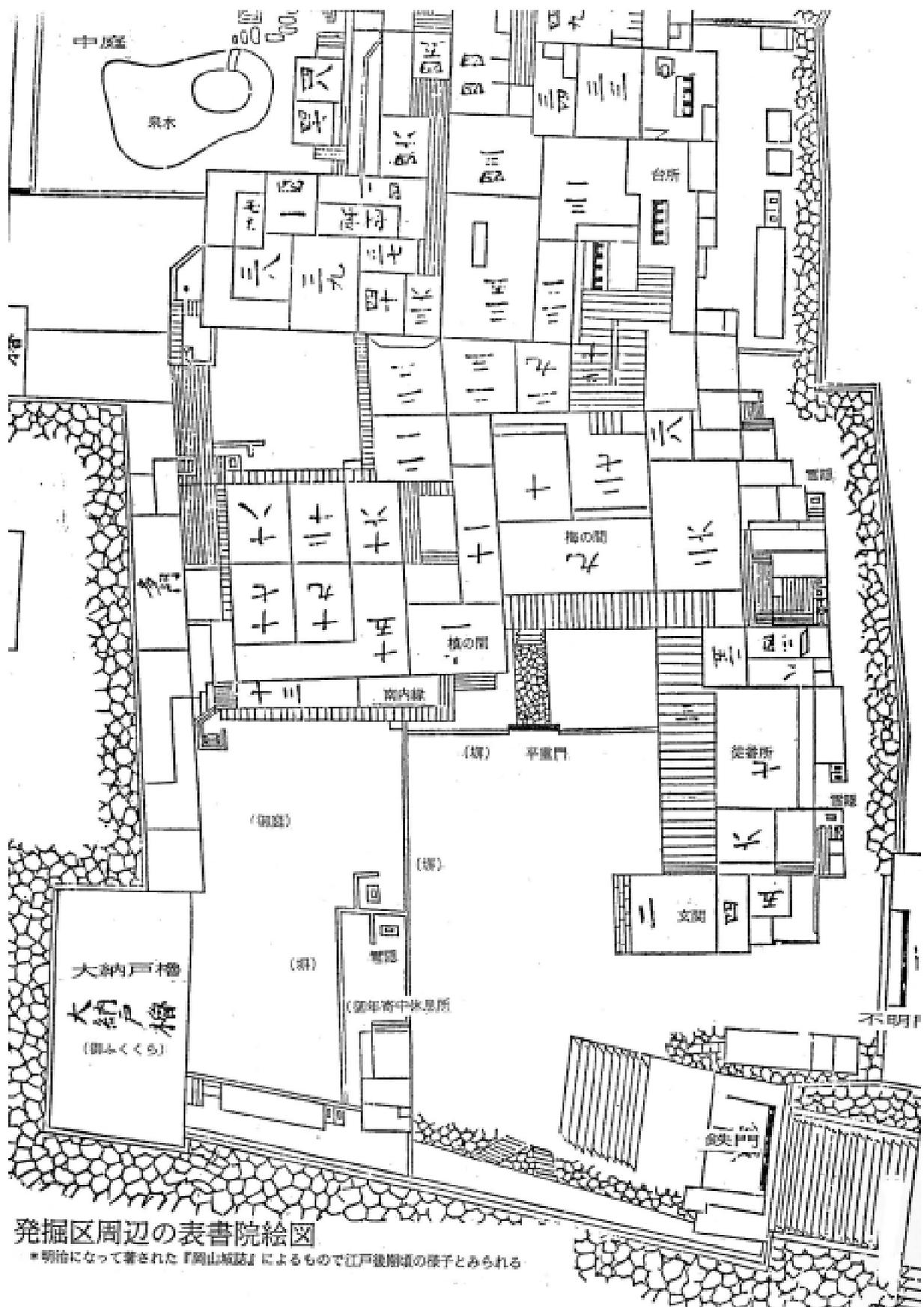
枳形の北には現在石垣がありますが、これは明治の岡山第一中学造成時のもので、その北奥本来の段石垣が埋め込まれていました。かなり壊されていますが、平重門の東柱用とられる切石の礎石やこれに至る階段の基礎も確認されます。北に続いて延石に挟まれた敷石通路があり、書院建物の礎石や縁側の束石が残っています。発掘区の南東部は、玄関から表書院の主要部へ繋がる廊下状の部分で、番所部屋の土壁が乗るとみられる石組や雪隠跡を示す穴、本段の高石垣に沿って北に延びる花崗岩石材を組んだ排水溝、またこれに沿っての侵入を阻止するためのものとみられる土壁の基礎敷石などがあります。側溝には、書院の縁の下から延びる豊島石を精巧に加工して組んだ暗渠などが取り付けます。

枳形の西は、現役の石垣が当時のものです。石垣に沿って上には、年寄中休所の建物礎石や雪隠跡、これらの施設の西を画する塀の基礎石列などがあります。一帯から先の敷石通路にかけては基本的に庭で、河原石がびっしりと敷きつめてあります。ここにも、豊島石製の暗渠が埋め込まれています。大納戸櫓の外壁は現役の高石垣に乗りますが、骨組みを支える柱の礎石も、一部が残っていました。

発掘で見つかった表書院関連の遺構

江戸前期（およそ1620年代）から幕末（1868年）まで





発掘区周辺の表書院絵図

＊明治になって著された『岡山城誌』によるもので江戸後期頃の様子とみられる

表書院に関連した層から出土



表書院の時代関連の遺物は、明治に御殿を破却した際の整地層やごみ穴からの出土がほとんどです。表書院や各櫓などに掲げられていた瓦は膨大量で、文様は普通の巴文や唐草文が圧倒的ですが、池田家家紋のアゲハ蝶文の軒丸瓦や鬼瓦、桐文や菊文の大棟に差込む小形の瓦などもあります。また、台所に近い北倒にあるゴミ穴を中心に、伊万里などの陶磁器、鯛の骨、アワビ、サザエの貝殻などの食物残滓が出土し、表書院で行なわれた饗宴の内容が窺われます。しかし、表書院は基本的に日常生活を営む場所ではないので、二の丸などの城下に比べれば、消費生活の匂のする遺物は少ないといえます。

3.表書院以前の遺構=中段が拡幅される以前(築城から江戸初期まで)

明治維新時ないしは現在ほぼ見られる中段の広がりや構造は、1591年から1597年にかけて宇喜多秀家が築城した当時の姿のままでは決してありません。昨年度の発掘では、表書院の建物遺構の真下で、古い中段の北縁を画していたとみられる野面積みの高石垣が確認されました。それを川砂で埋め立て、中段を拡張して新たに築いた石垣の、角に建っているのが月見櫓です。月見櫓は、記録から池田忠雄が城主の時(1620年代頃)に建てられたものです。櫓は石垣と一帯ですので、中段の拡張もこの時のものでしょうし、各土層から出土した遺物の年代もこの考えを支持しています。下層遺構はそれ以前のものということになります。

表書院関連遺構の残りの悪い場所では、こうした下層遺構の様子が、断片的とは言え分かってきました。下層遺構と一括したものは、実は数時期から成るものを含んでいます。表書院が約250年もの長い間ほぼ同じ地盤面(一部では2面)で同じような段・建物構造で持続したのに対し、たかだか40年足らずのあいだに、山土による新たな地盤面の造成や建物の築造、石垣の破却や切り合い・改造が目まぐるしく繰り返されています。基本的に

は、先行する地盤面を埋めの方向に動きますので、場所によっては最下の遺構は、表書院面の下 3m 近くもの深さにまで達します。それはもう、絵図や現況からは窺い知れない内容です。確認が断片的なことと、それ自体の複雑な構造に阻まれて、未確定な点も多いのですが、表書院の時代に比べ、南の枳形がより広く、その周囲により高い石塁や土塁があって、石垣段なども含めて起伏に富み、その後の中段そのものの北への拡幅も合わせて、御殿の建つ空間がかなり狭かったという状況が確認できます。

これは、下層の時期が未だ戦国時代という背景から、初期の岡山城が軍事優先であったのに対し、徳川政権の安定化に伴い、政治を行なう場所としての側面が強まり、中段そのものを拡張したり、折角造った石垣を埋めてまでして、政治を行うための御殿を広くとる方向に進んだ結果と考えられます。また、城を造る技術が飛躍的に進み、軍事的に独自のポリシーを持った城主の系統が目まぐるしく変わった時期ですので、頻繁な改造もうなずけます。なお、徳川幕府の安定化とともに、城の改造は制度的にも厳しい管理下におかれます。それが、表書院の時代です。

具体的にみていきましょう。大納戸櫓の城内側の石垣は、表書院の時代は高さ 1m 余りの状況でしたが、その根を追及すると 3m 余りもの高さになりました。櫓の北には石塁があって、これも城内側の高さが 2m ほどあります。東側は表書院の時代には完全に埋まっていたましたが、ここにも石塁が取り付き、さらに東の現役石塁に続いています。東石塁には、石塁の根の地盤から排水を行なうための暗渠が、高石垣側の開口部まで貫いています。こうしたトンネルは、一般に城の抜け穴と呼ばれるものの正体の一つですが・開口部が石垣半ば上よりという高さの秘密は・内部の生活面の深さにあったわけです。いずれにしても、大納戸櫓が建てられたときは、枳形がその東まで広がり、城内側から見て高さ 3.5m もの本格的な櫓台の上にそびえていた事になります。

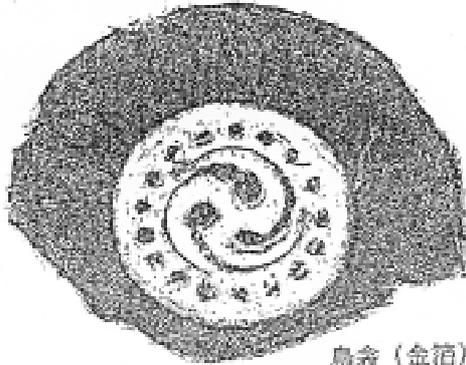
ところが、この櫓台の石垣の下から、櫓台内部に埋め込まれた石垣が確認されました。これは、先の北と東の石塁と平行しつつも更に城内に引いた位置にある先行石塁の内側石垣に続きます。つまり、大納戸櫓に先行して別の平面形態があり、この構造こそが宇喜多秀家による築城当時のものの可能性が考えられるわけです。逆に、大納戸櫓は秀家期までは遡らず、小早川氏の時に建てられたという伝承と合ってきます。また・そうでよいなら、櫓に取り付く石塁なども一体ですので、秀秋は岡山城での短い治世の間に、相当規模の大改造を実現した事になります。彼ないしその家臣団は・関ヶ原での「裏切り」処理対策もあって、軍事的に守りを固める必要性を痛感していたはずですよ。

大納戸櫓の内石垣はその後、1～2 時期にわたって埋められた様で、例えば途中の地盤で敷石などが確認されます。表書院庭の地盤はその最後に出来上がったものです。

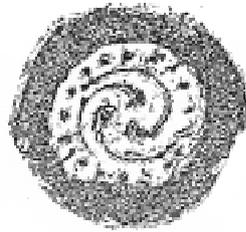
調査区の半ば付近では、古い段階の枳形の北側を画する段石垣が複数確認されました。図の A から順に造られ、また埋められた様ですが、より古いものは東西軸に対して斜めの走行を持ち、背中合わせに北向きの石垣もあって、間が土塁になっていたようです。土塁の土層断面を見ると、細かい千本突の単位がみえ、上部は枳形の敵を迎撃するための建物などが建っていた可能性も考えられます。下層でも新しくなると、表書院の時代と同じく正東西方向で南向きの段となります。

出土した各種瓦

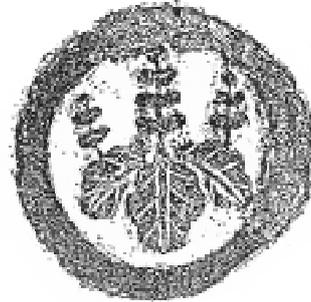
安土桃山～江戸初期（宇喜多・小早川・初期池田氏の時代）
表書院より下の層から出土



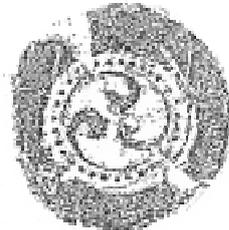
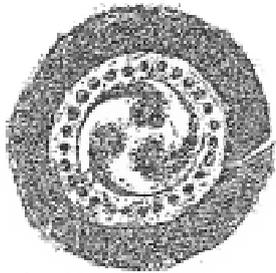
鳥衾（金箔）



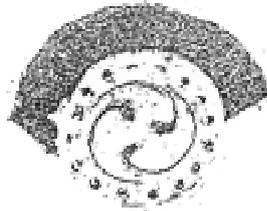
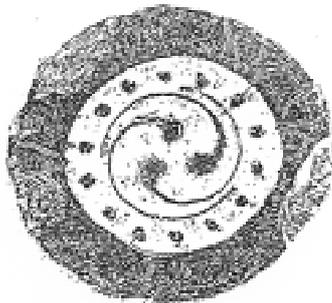
獅子口（金箔）



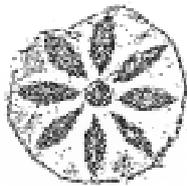
参考=天守閣伝世品（金箔）



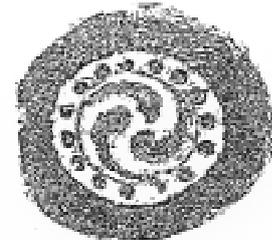
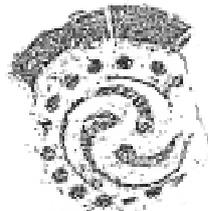
桐の花の部分
（金箔・昨年度出土）



宇喜多期ではない？桐文



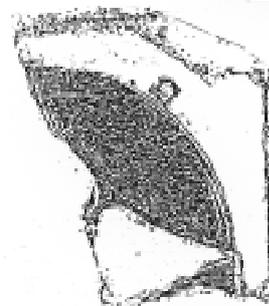
板込瓦



0 10cm



板状の飾瓦（桐？）



板状の飾瓦



段や土塁の北側には、御殿のものとみられる、礎石列などが確認されます。最もまとまるものでも、御殿の規模などは確定に至りませんが、あくまで本段から1段下がった位置にあるので、秀吉の大坂城などの例から推して、後の表書院に通じる・表向きの公的な性格を帯びたもので、生活の場などではないと考えられます。出土する陶磁器類は、上層にもまして少なく、内では一貫して楯形と考えられる南側は皆無に等しいのに対し、御殿の建つ北に儀式用とみられる素焼きの坏がやや集中する個所がある事は、以上の見通しを支持しています。また、本年度で最も北の発掘区は、廊下門の前身的ないわば裏門が予想され、石垣や敷石が確認されますが、本日までのところ構造の確認には至っていません。

なお、旧中段の中央付近では、表書院面の地下約2mのところ、風化した花崗岩の岩盤が確認でき、本丸一帯が本来あった自然の丘を巧みに利用していることがはっきりしました。

下層関連の遺物は、ほとんどが瓦です。地盤造成を伴う檜や御殿などの建替えは、先行建物の解体を意味します。その際、瓦は慎重に降ろして新しい建物に転用したはずですが、どうしても割れるものもあつたはずですが、そうした瓦は、古い地盤を覆う造成土中に投げ捨てられたようで、場所によっては瓦が累々と重なっています。

先ず、注目されるのは金箔を押した瓦です。鬼瓦の上に組み合わせて使う鳥衾、獅子口と呼ばれる広義の鬼瓦の一種などが出土しています。やや、遅れる時期に廃棄されたものようですが、秀家時のものと考えてよく、桃山時代の時代性を示すとともに、秀吉との

親密な関係に基づいて葺く事ができた瓦と言えます。「金烏城」の名もありますが、屋根全体が金ピカという事はなく、金箔瓦は、天守閣のほかに、この段や二の丸にあったの建物など広範に掲げられていたけれど、ひとつ屋根の内では極めて限定された目立つ部分の文様面のみで、箔を押さない軒瓦と共に用いられていたのが事実のようです。

金箔は認められず、宇喜多期よりやや遅れる時期のものともみられますが、板状の飾り瓦や、人物を表現した意匠の詳細不明の鬼瓦などがあります。一般の軒丸瓦の文様は、桐などもありますが極少なく、巴文が圧倒的です。軒平は左右に唐草を配し、中心は宝珠か三葉がほとんどで、菊やその他が少量認められます。軒丸・軒平の文様は、細かくは多種多様で、一つの建物にかなりばらばらの文様のものを掲げていたようです。その一方、本丸外の二の丸、県下の他の城や寺などに同じ型で作られた瓦が認められます。これは、岡山城本丸や城下町が突貫で一元的に建設され、同時に多量に焼かれた瓦が微細な文様差を無視して供給された事や、岡山城内外の古い建物を解体して古材を流用した事などが背景として考えられます。また総じてみれば、姫路周辺の瓦製作集団との関係を匂わす文様が多く、結果として、例えば、秀吉の大坂城出土品に近いものも目に付きます。